

2016年10月30日（10月31日微修正） 12月16日改訂 12月20日再訂（12月24日微更新） 2021年12月15日 ii 三訂

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 2 1

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

近年、アジア海事史学界で注目されている欧米図書館所蔵の二つの中国系地図に触れておきたい。

1. セルデンの中国地図 (Bodleian Libraries, University of Oxford)

既にブルックの著作の翻訳[ブルック 2015]もあるのでご存知の方もあろうが、17世紀初頭に作製されたとされる《セルデンの中国地図》は、東アジア・東南アジアのどこかからイギリスに渡り、ジョン・セルデンの手を経てボールドウィン図書館に寄贈された。近年になって修復が施され2011年に公開されると、広く関心を呼び、その正体についてさまざまな議論がなされている[Batchelor 2013; Nie 2014]。この地図は、東アジア（日本、朝鮮、中国）から東南アジア島嶼部までを広域的に描き、海上に航路を書き込んだもので漢字で地名や航路の方角が記されている。漢字表記の地図であるから製作者・使用者が中国人であったことはおそらく間違いない（製作者のなかには非中国系の人もいたかもしれない）が、従来知られている中国の諸地図とはかなり様相を異にする。そのため、明朝中国の海洋性についての新しい歴史理解に道を開くのではないかという期待も寄せられている。

つい最近、この問題についてきわめて興味深い重要な研究が公刊された。Haida Liang らのグループによって行われた地図の彩色に使われている材料の科学的分析である[Kogou et al. 2016]。この研究は、セルデンの中国地図で使用されている媒材や顔料が中国系の絵画では使われないものでありインド・イランで一般的な材料であること（とくに媒材としてアラビアゴムが使われていることが強調されている）を解明し、さらに、ヨーロッパの地図に倣ってこの地図に示されている磁気偏角が同時期のアチェのそれと近似していることを指摘している。その結果を踏まえて、この地図の製作地として従来挙げられてきた候補地（泉州或いは漳州、マニラ、バンドン）の難点を示した上で、ペルシア、アラブ、インド、中国、ヨーロッパの交易者たちがしばしば訪れる交流の中心地であるアチェを新たな候補地として挙げている。この結論は、泉州と日本・台湾・フィリピンとの関係に注目しすぎる東・北「偏向」や泉州などの中国の都市的商業的文化の発展とこの地図の製作を直結させようとする性急な見解に再考を促すものであり、大変重要な意味を持つと考えられる。

そもそも、この地図を見たときに真っ先に気がつくのは東南アジア方面の描写の「新しさ」である。16世紀の中国を代表する地図といえば羅洪先『廣輿図』である（現存の刊本の刊行年：1558年、1566年、1579年）が、そのなかの「輿地総図」[海野 2010: 口絵第3図、

33,46,55]と比べて《セルデンの中国地図》の中国本土の輪郭の描写はそれほど新鮮な印象は無い(なお、この中国本土の描写自体はむしろ閉鎖的で限定された空間のように私には見える)。ところが、東南アジア方面を含む「東南海夷図」「西南海夷図」[海野 2010: 121-144]と、《セルデンの中国地図》の東南アジア方面の描写を見比べれば、その違いは歴然としている(海野一隆によれば、「東南海夷図」「西南海夷図」の元になった李沢民の地図は元代に東南アジアで収集された現地製の地図を参照している可能性がある。もしそうならば東アジアと東南アジアの地図の伝統を継ぐものといえよう。)。そして、《セルデンの中国地図》の東南アジア方面の描写が、オルテリウスの世界地図の中のアジア図(1570)の出現以降に標準化・洗練されてゆくヨーロッパの諸地図における東南アジアの描き方に類似していることも明らかである[Suarez 1999: ch.13]。

少なくとも東南アジア方面の描写は、16世紀末からアジアの海で広まっていたであろうオランダやポルトガルのポルトラーノ海図などをお手本として参照して作製されたと見るのが妥当ではないか。この地図の最大の特徴は、ポルトラーノ海図と異なり、地図上に羅針方位線を張り巡らすのではなく、主要な港間の航路を線で描いていることである。ブルックは修復チームの発見した知見に基づきこの地図の製作の過程でまず航路が先に書かれ、それを準拠枠組とすることによって東南アジアの輪郭を正確に表現できたのであってヨーロッパの海図・地図の影響は小さいと評価している[ブルック 2015: 241-246]。Haida Liang らの最近の研究によれば、地図作製の過程としては基本的には航路が先に書かれて後に陸地が書かれているが、場所によっては海岸線を書くために陸地の線がずらされている場合もある(とくにインドシナ半島の南端)ということであり[Kogou et al. 2016: 12-15]、やはり東南アジアの輪郭の描写に関してヨーロッパの海図の影響を過小評価はできないと私は考える。そもそも海上航路の線を方角と距離にしたがって正確に地図上に書き落とししてみようという発想は、ヨーロッパの地図を見て初めて思いついたものではないだろうか(まず試しにヨーロッパの地図の上に書き込んでみたのではないか)? 「東南海夷図」「西南海夷図」の上でそれを試みようとはおそらく思わないであろう。

次節にみるように南シナ海の中国系の航海の実務者は19世紀の半ばに至っても、ヨーロッパ流の海図は受け入れてはいないようであるが、この地図製作者が船乗りとして南シナ海を表象しようとしたわけではないことに注意が必要であろう。この地図の航路には、中国式の方位が漢字で細かく記されているが、地図に描かれていないカリカットからアラビア海沿岸までの航路の説明部分を除いて中国船の船乗りの常識とも言える「更」(距離乃至は所要時間)は地図上に記されていないようである。或いは、「更」が時間距離であるとするれば、地図製作者はその「更」を単なる距離に置き換えないと(たとえば地図上の1寸[この地図の定規の1目盛]を10更とする等)線分を描くことができないが、このように「更」を単なる距離(線分)に固定してしまう(そして消してしまう)感覚は当時の船乗りのそれとは異なるかもしれない。もし当時の船乗りの脳内地図が『鄭和航海図』に近いものであったとすれば、このような航路図はかなり目新しいものに見えたであろう。この地図がアジア航

路や交易の全体像についての正確なイメージを伝えようとするものであることは確かであろうが、実際の航海で使うというよりは、あくまで装飾的な目的で使われていたのではなかろうか。

このような理解を前提として、《セルデンの中国地図》の南シナ海描写を検討する。これは非常に独特なものである。インドシナ半島とフィリピン諸島に挟まれた海域のベトナム寄りの南北に伸びる縦長の範囲に危険地帯が描かれている。南シナ海の空間をこのように地図上に構成することは、従来中国系（あるいは非中国系の現地の）の航海者も地図製作者もまったく思いもよらなかったことではなかろうか。これはヨーロッパの地図（おそらく海図）から、この地図の製作者が学んだことと考えられる。しかし、危険地帯そのものの構成には、危険地帯が二つ以上のクラスターからなるという中国的な知識を盛り込んでいる。北側にはやや縦長の囲みの中に「萬里長沙」とあり、南側には丸のなかに「萬里石塘」と記され、その南には多数の不ぞろいの黒の点からなるやや曲がった何本かの列で波のような図柄が描かれている。「萬里長沙」の左には「似船帆様」、両者の中には「嶼紅色」という注記と思われる文言がある。「似船帆様」という表現は、遠くから見ると島影が船の帆のように見えるということを行うために次の節で検討する航海図では多用されている。決まり文句であろう。「嶼紅色」という注記のほうは、地図製作者が海上のどこかで危険地帯の珊瑚の色について聞いた話を盛り込んだのかもしれない。これらの情報はややリアリティがあるとも言える。しかし、全体の描写は現実とはかけ離れている。現実の地理を正確に記述したものではない（現実の地理の正確な知識がまだない）以上、現在の地名との対応を考えると（ブルックが少し試みているが）にあまり意味はない。

広東から海南島を回ってインドシナ沿岸を進む航路の東側にある危険地帯に関するヨーロッパ的表象と中国的観念を掛け合わせて出来たものが、《セルデンの中国地図》の南シナ海像であり、まことに稀有のものといえる。

Batchelor は別の想定を持っている[Batchelor 2013: 52-53]。《セルデンの中国地図》とポルトガルの海図に共通に見られる特徴は、南シナ海のより古い地図製作の伝統に発すると考えている。そのような地図は実際には残っていないので、古い伝承と彼がみなすものが採用されている。一つは、「パラセルが帆の形に似ている」という伝承、いまひとつは「スプラトリーが”a snake with veins’の頭に似ている」という伝承である。「パラセルが帆の形に似ている」という伝承に基づき、ポルトガルの海図のパラセルは船の帆のように描かれ、《セルデンの中国地図》には「似帆船様」と書き込まれたと Batchelor は見ている。しかし、ポルトガルの海図上のパラセルは確かに船の帆のようにも見えるが、とくに伝承への言及はない。「似帆船様」は上記のとおり遠くから見た島影についての注意であろう。地図上にいきなり地図表象の伝統的パターンについて自己言及的な書き込みをする理由が私にはわからない。「スプラトリーが”a snake with veins’の頭に似ている」という伝承は『島夷志略』に由来するとしている。おそらく『島夷志略』の「萬里石塘」の記述を指すのであろうが、この記述はスプラトリーについて述べているものではない。潮州に生じた「石塘之骨」が海

を越えた諸国まで海中をうねうねと長蛇のように続いていることと、中原の地脈が三つに分かれて東南アジア・インドへ続いていることを述べているものである。Batchelor は、ポルトガルの海図上のパラセルの一番南側に付された尻尾のような部分がこの伝承の名残であると見るのだが、無理があろう（《セルダンの中国地図》の黒点列はこの伝承の名残のように見えなくも無いが、論文上の図は不鮮明で確たることは言えない）。アジアに関するヨーロッパ的表象（オリエンタリズム）に先立つものを無理に想定する（リオリエンタリズム？）ことがむしろ思考の制約となっているのではあるまいか（ヨーロッパの地図における「想像のパラセル」の図柄がどこから来たものかという問題は様々な可能性に開かれている。1570年のオルテリウスの地図にはこの図柄は見えないが、1584年の地図には現れている。この間に何が起こったか？現地の船乗りがこんな絵を描いて見せたのかもしれないし、ヨーロッパ人の船乗りの思い付きかもしれない。南シナ海の危険地帯の枠内を多数の点で埋めるという表現と『鄭和航海図』の「石星石塘」の描写の類似性にも留意が必要であろう。）

又、Batchelor は、ポルトガルの海図の南シナ海の記述より《セルダンの中国地図》の記述のほうがより coherent で navigationally useful であり、その製作者はこの海域に関するより明確に理解していたと述べるが、地図表現という点ではいずれも現実離れた表象であるにすぎないし、航海の視点からはいずれも航路の東側の危険地帯を強調する「実用的」なものであり、とくに選ぶところは無い。

2. イェール大学所蔵清代航海図 (Sterling Memorial Library, Yale University)

1841年にイギリス海軍 H.M.S.Herald 号が中国商船から押収した「航海図」がイェール大学スターリング図書館に所蔵されている。1974年につとに台湾の李弘祺が発見し学界に紹介していたが、近年になって広く注目を集めるようになっていく。この「航海図」は122幅の図からなり、北は日本の五島列島、南はシャム湾までを対象としているが、その図の順序は無秩序なまま保存されていた。2013年に銭江と陳佳栄が、これらを北から南への航路の順に配列しなおし、この地図の航路の中心が南灣にあり、製作者も南灣の人であろうとの見解を示した[銭江&陳佳栄 2013]。同論文は配列しなおされた諸図の影印を付している。また2016年にはベトナムの Pham Hoàng Quân がこの成果を踏まえてベトナム沿岸の諸図について詳細な地名に関する注を付したベトナム語訳を公刊している[Pham 2016]。

この「航海図」は、航路の目標となる島や岩や陸地の絵図と水路誌的説明文（描かれた陸標に対する方向、陸標近辺の注意事項、陸標間の航路の方向と距離／所要時間[更]、陸標近辺の水深[托]）からなる。どの方向から接近するかによって陸標の見え方が違うことを別々の絵図で表現しているところが特徴的である。絵はやや稚拙であるが、おそらく実用的であったと思われる。

この「航海図」では、ベトナム中部沿岸の「尖筆羅(Cù lao Chàm)」や「外羅(Cù lao Ré)」の反対側にフランスパンをでこぼこにしたような細長い島の絵が描かれ、「萬里長沙」ある

いは「長沙尾」「石塘頭」と記されている。「長沙尾」は別の図からの続きであり、「萬里長沙」の末端の意、「石塘頭」は長い島の端に記されており、「石塘」の始まりの意ではないかと思われる。要するに南シナ海のインドシナ沿岸航路の東側の危険地帯は、細長い二つの島として描かれている。

ここで注意したいことは、このような伝統的「航海図」が 1841 年にも普通に使われていたらしいということである。もちろん、それは中国の伝統的航海技術の優秀さを示すものではあるが、南シナ海認識という点からすると現実とは程遠い表現であることは明らかである。19 世紀初頭のイギリス海軍の調査以来、ヨーロッパの海図に実際のパラセルが正確に描かれるようになってきていることを考えると、明らかに中国航海者のパラセル認識は時代遅れである。

海野一隆. 2010. 『地図文化史上の廣輿図』東京：東洋文庫.

銭江&陳佳榮. 2013. “牛津藏《明代東西洋航海図》姐妹作：耶魯藏《清代東南洋航海図》推介」『海交史研究』2013 年第 2 期.

ブルック,ティモシー (藤井美佐子訳). 2015. 『セルデンの中国地図：消えた古地図 400 年の謎を解く』東京：太田出版.

Batchelor, Robert. 2013. “The Selden Map Rediscovered: A Chinese Map of East Asian Shipping Routes, c.1619.” *Imago Mundi* 65:1.

Kogou, S., Neate S., Coveney C., Miles A., Boocock D., Burgio, L., Cheung, C.S. & Liang, H. 2016. “The origins of the Selden map of China: scientific analysis of the painting materials and techniques using a holistic approach.” *Heritage Science* 4:28.

Nie H.A. 2014. *The Selden Map of China: A New Understanding of the Ming Dynasty*. London: Bodleian Libraries.

Phạm, Hoàng Quân. 2016. *Tập Bản đồ Hàng hải 1841 ở Thư viện Đại học Yale: Dịch và Chú giải: Nghiên cứu về những ghi chép trong sử liệu Trung Hoa liên quan đến các địa danh ven bờ và hải đảo*. TPHCM: Nhà Xuất bản Văn hóa – Văn nghệ.

Suarez, Thomas. 1999. *Early Mapping of Southeast Asia*. Hong Kong: Periplus Editions.

付記

西欧から東南アジアまでを対象とする 16 世紀のポルトガルの海事書『フランシスコ・ロドリゲスの書』(1511~15) の複写版が 2008 年に出版され、日本でも紹介がなされている [Garcia 2008 ; 合田 2012 ; 中島 2014]。

同書は、航海手引、水路誌、海図からなるが、東南アジア島嶼部の海図も含まれており、

その中には「シナに至る海岸」線が描かれたものもある。合田昌史によれば、その海図には「南方に岩礁などを意味する多くの波線と浸水や氾濫を意味する「アリュガダス」という名の群島がある。同群島の東隣に5つの島があり、さらにその北北東に位置する島には「レケオリエル」という名が与えられている。アリュガダス諸島は、西沙諸島あるいは南沙諸島、レケオリエルはフィリピン諸島の一部に比定されている」。ロドリゲスは、「ジャワの水先案内人の大型図」を参照していることが知られている[合田 2012: 165 ; 中島 2014: 48]ので、あるいはこれらの図柄もジャワの航海者に由来するものかもしれない。

当該地図を見ると [Garcia 2008: 89, 102-103, folio39;合田 2012; 167-168]、アリュガダス諸島は、不定形（縦長ではない）の囲みの中を S 字を寝かせたような小さな模様で埋め尽くした図柄で描かれている。これは後の南北縦長の囲みを点で埋め尽くす「想像のパラセル」の図柄のアイディアの源泉のひとつである可能性はあろう。この群島の東に描かれた5つの小島の図は、もしかすると、オルテリウスの 1570 年の地図に描かれた I.Paracel の6つの小島と関連があるのかもしれない。しかし、そうだとすると、1570 年のオルテリウスが、アリュガダス諸島の不定形の囲みの図柄を無視した理由が不明である。16 世紀初頭の南シナ海の危険地帯の描き方に、囲みのなかを小さな模様で埋め尽くすパターンと5つないし6つの小島で描くパターンがあり、ロドリゲスには両者が描かれていたのに、16 世紀後半には、何らかの経緯でそのうちひとつだけが選ばれるようになったということであろうか。このような推論を検討するには、16 世紀の地図表現の変遷を丁寧に精査する必要があるが、私の手にはあまる仕事である。

ここでは、16 世紀末から 18 世紀までの西欧の地図におけるパラセルの描写の変遷について私がとりあえず知りえたことをまとめておきたい。

[Durand 2013][Fell 1991]に掲載されている地図の描き方の特徴について時系列に沿ってまず並べてみる。

Jan Huygen van Linschoten, *Exacta & Accurata Delineatio cum Orarum Maritimarum et jam locorum terrestrium quae in Regionibus China, Cauchinchina, Camboja sive Champa, Syao, Malacca, Arracan & Pegu....* Amsterdam, 1595

南北縦長の囲みを点と小紋で埋める。

北端に二つの小島が描かれる。 [Durand 2013: P.90 map 15]

Gerardus Mercator, *Insulae Indiae Orientalis*, Amsterdam, 1632

縦長の囲みのなかを点と十字の小紋で埋める。 [Durand 2013: p.95 map 21]

Mercator/Hondius/Jansson, *Insulate Indiae Orientalis*, c.1635

南北縦長の囲みのなかを点と小紋で埋める。 [Fell 1991: Plate 2]

Johannes Janssonius, *India Orientalis Nova description*, Amsterdam, 1636

縦長の囲みの中を点と十字の小紋で埋める。

北端に三つの小島が描かれる。[Durand 2013: p.98 map 24]

Willem Blaeu, *Asia noviter delineate*, Amsterdam, c.1617-42

縦長の囲みのなかを点で埋める。

北端に二つの島が描かれる。[Durand 2013: pp.96-97 map 22]

Jean Boisseau, *Les Isles des Indes Orientales*, Paris, c.1643

縦長の囲みの中を点と十字の小紋で埋める。[Durand 2013: p97 map 23]

John Speed, *New Map of Est India*, London, 1676

縦長の囲みの中を十字の小紋で埋める。

北端にいくつかの小島が描かれる。[Durand 2013: pp.104-105 map 31]

Nicolas Visscher, *Indiae Orientalis*, c.1680

縦長の囲みのなかを点で埋める。

北端にいくつかの小島が描かれる。[Fell 1991: Plate 4]

Pierre Mortier, *Le Royaume de Siam avec les Royaumes qui luy sont Tributaires*, Amsterdam, 1700

縦長の囲みのなかを点で埋める。

北端に6つの小島が描かれる。

Amphitrite の位置に〈小円+小紋〉の抽象的図柄が付加される。[Durand 2013: p.106 map32]

Henri Chatelain, *Le Royaumes qui luy sont Tributaires*, Amsterdam, c.1708.

縦長の囲みのなかを点と十字の小紋で埋める。

北端に6つの小島が描かれる。

Amphitrite の位置に〈小円+小紋〉の抽象的図柄が付加される。[Durand 2013: pp. 106-107 map 34]

Emanuel Bowen, *Map of the East India Islands*, London, 1747

Emanuel Bowen, *East Indies*, c.1747

縦長の囲みのなかを点と小紋で埋める

Amphitrite の位置に〈小円+直線〉の抽象的図柄が付加される。[Durand 2013: pp114-

115 map 41 ; Fell 1991: Plate 5]

Guillaume de L'Isle/Girolamo Albrizzi, *India di la del Fiume Ganges overo di Malacca, Siam, Cambodia, Chiampa, KochinKina, Laos, Pegu, Ava etc.* c.1750

縦長の囲みを細かな点で埋める。

北端に三つの小島が描かれる。

Amphitrite の位置に〈小円＋直線〉の抽象的図柄が付加される。[Fell 1991: pp.88-89 figure 17]

Jean Baptiste d'Anville, *Further India*, c.1755

縦長の囲みのなかを多数の小島で埋める。

Amphitrite の位置に〈小円＋直線〉の抽象的図柄が付加される。[Fell 1991: p.95 Figure 18]

Rigobert Bonne, *La Presqu'Isle de l'Inde au de la du Gange, avec l'Archipel des Indes Partie Occidental*, Paris, 1787

囲みのなかを多数の小島で埋める

Amphitrite の位置に〈小円＋直線〉の抽象的図柄が付加される。[Durand 2013: P121 map 47]

17～18 世紀の西欧の地図では、パラセルは基本的に南北縦長の囲みの中を点また小紋で埋める描き方が基本であったが、その図柄の北端に小島群あるいは Amphitrite 側に抽象的な記号が付加される場合もあった。Amphitrite 側の記号が付加されるのは 18 世紀以降のことと思われる。また、18 世紀後半には、囲みの中を点や抽象的な小紋でなく、やや具象的な多数の小島で埋める描き方も現れる。1770 年の Dalrymple の海図もこの描き方を採用している。

ここで注目すべきは、北端の小島群の図柄が、すでに 16 世紀末の Linschoten の地図に現れていることである。[Trần 2014: 32-33]の紹介する 1571 年と 1576 年の Fernao Vaz Dourado の地図や[Suarez 1999]の紹介する 1584 年の Ortelius の地図は、細部が不鮮明で判断が難しいところもあるが、これと類似の描き方をしているように見える。囲みを小紋で埋める図柄とやや具象的な小島群を描く図柄を組み合わせるという点では、ロドリゲスの地図の描き方を継承していると見られなくもないように思われる。しかし、囲みが南北縦長に伸びインドシナ半島と並行するように描かれるようになり、小島群がその北端に置かれるようになったという変化は大きい。その変化が何時如何にして起きたのかについての説明は私には難しい。

北端に置かれた小島群の位置が実際のパラセルの位置に近似しているように見える点も

興味深い。当時の西欧の航海者は、実際のパラセルについてある程度理解を有していたのだろうか。そうだとすると、このタイプの西欧の地図のパラセル表象は、実際のパラセルの萌芽的認識と伝説的危険地帯のイメージーションの組み合わせで出来上がっていたということになる。それとも囲みを南北に引き伸ばして描くようになったときに偶然北端に置かれたにすぎないのであろうか。後致を俟つ。

[中島 2020]のなかのロドリゲス図を扱った二つの章（「フランシスコ・ロドリゲスの地図（一）（二）」）に本考察に関連する極めて重要な知見が含まれている。

第一は、ロドリゲス図に描かれた南シナ海の危険地帯（「浸水諸島 *Ihas allagadas*」）の描写がそれに続くアジア図にどのような影響を与えたかについての新発見である（pp.91-101）。氏の周到丁寧な読図により、1519年にレイネル父子が作成したアトラス（旧所有者の名によりミラー図と呼ばれる）のなかの第七図の東南アジア海域を描いた箇所にロドリゲス図の「浸水諸島 *Ihas allagadas*」の影響のもとに「モカロール諸島 *Insule Mocalor*」が描かれていることが明らかにされた。ロドリゲス図では限定された地理的範囲を描いた地域図のなかに南シナ海の危険地帯が描かれていただけであるが、ミラー図ではアジア広域図のなかに南シナ海の危険地帯が位置付けられており、南シナ海の南方に東西に長く伸びるかたちで描かれている。これは次の時代に出現する「想像のパラセル」を準備したもののようにも見える。東西に長く伸びる危険地帯をインドシナ半島に沿って南北に配置すれば「想像のパラセル」となるというのはやや強引であらうか。なお同氏は「浸水諸島 *Ihas allagadas*」や「モカロール諸島 *Insule Mocalor*」をパラセル諸島に比定するというような書き方をしておられるが、この時代にはまだ南シナ海の危険地帯について正確な地理的知識は得られていなかったであらうから、そのような比定は時代錯誤的ではあるまいか。

第二には、インドシナ半島東岸から広東に向かう航路上のランドマークであるプロ・カントンに関する注目すべき史料の紹介である（pp.79-82）。それは『ロドリゲスの書』に含まれるマラッカから中国への航海誌である。この資料は既に英訳[Cortesão2016]もあり新発見のものではないが、少なくとも日本では注目されてこなかったものであろう。イギリス海軍水路部系の水路誌ではプロ・カントンと言えばベトナム・クワンガイ省沿海のリーソン島（*đảo Lý Sơn* あるいは *cù lao Ré*）のことであるが、なぜベトナム中部沿岸の小島がカントンの名で呼ばれるのか、以前から不思議であった。ロドリゲスの航海誌はプロ・カントンについて別様の記述を提示している。ロドリゲスの航海誌では二つのプロ・カントンが記述されている。原文（私はポルトガル語は読めないが、地名は追える）では *pulo cotom* と記され、英訳では *Pulo Canton* とされている。中島訳は最初のそれをプロ・コトンと記し、二番目のそれをプロ・カントンと記し、区別をつけているが、そのことについて説明がないのは不親切である。最初の *pulo cotom* は明かにリーソン島のことである。二番目の *pulo cotom* は海

南島の北東に 20 ジャン（1 ジャンは 3 時間の航行距離）進んだところにあり、そこから北東に進むと広州湾のタマン港に到着する。その際にトンキン湾に流されないように東に舵を保つ必要がある。広東の手前のランドマークがプロ・カントンと呼ばれているのは理解しやすい。しかし、ベトナム中部沿岸の小島が何故プロ・カントンと呼ばれているのかは謎のままである。トンキン湾に流されないようにせよとの注意はリーソン島から海南島への航路にふさわしい忠告のようにも見える。プロ・カントンを巡る情報は当初から混乱していたのではあるまいか。なお英訳は二番目のプロ・カントンは海南島の北東ではなく南西 20 ジャンのところにある **Canton rock**（リーソン島とは別、ダナン港の入り口）のことであるとされているが、その岩はこの簡単な航海誌において敢えて指示すべき意味のあるランドマークだったのであろうか？

Corteseo, Armando.ed. 2016.*The Suma Oriental of Tomé Pires : An Account of the East, from the Red Sea to Japan.*London ; New York, New York : Routledge.

Durand, Frederic. 2013.*Maps of Malaya and Borneo: Discovery, Statehood and Progress (The Collections of H.R.H. Sultan Sharafuddin Idris and Dato' Richard Curts.* Kuala Lumpur: Editions Didier Millet.

Fell, R.T.. 1991. *Early Maps of South-East Asia* 2nd ed. Singapore: Oxford University Press

Jose Manuel Garcia ed. 2008. *O Livro de Francisco Rodrigues: O Primeiro Atlas do Mundo Moderno.* Porto.

Trần, Đức Anh Sơn. 2014. “Thu tịch và bản đồ cổ phương tây chứng minh chủ quyền của Việt Nam đối với hai quần đảo Hoàng Sa và Trường Sa.” Trần Đức Anh Sơn ed. *HOÀNG SA TRƯỜNG SA: TƯ LIỆU VÀ QUAN ĐIỂM CỦA HỌC GIẢ QUỐC TẾ.* Hà Nội: Nhà Xuất bản Hội Nhà văn.

合田昌史. 2012. 「ポスト・モンゴル時代の海洋インテリジェンス：16 世紀前半ポルトガルの地図と海事書をめぐって」『東洋史研究』71-3.

中島楽章. 2014. 「フランシスコ・ロドリゲスの地図：ポルトガルの海域アジア進出と世界図」『史観』

中島楽章. 2020. 『大航海時代の海域アジアと琉球』京都：思文閣出版